

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2394400010		
法人名	特定非営利活動法人 和		
事業所名	グループホーム じぶんち		
所在地	愛知県知立市谷田町南屋下88番地2		
自己評価作成日	令和 3年 12月 8日	評価結果市町村受理日	令和4年2月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JigyosyoCd=2394400010-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人『サークル・福寿草』		
所在地	愛知県名古屋市中熱田区三本松町13番19号		
訪問調査日	令和3年12月27日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ホームでは、入居者の個性や人格が尊重され、その人らしい生活が継続できるように支援をしている。新型コロナウイルス感染防止のため外出や外部の人との関わりが難しい中でも、蔓延状況を考慮したドライブや散歩などを楽しむよう心がけている。ホーム内での「生活の楽しみ」が増えるようにゲーム大会、食事やおやつのパイキングなど、月1回お楽しみ行事を取り組んでいる。入居者の状況の把握、情報収集を全職員で丁寧に行い、意見交換ページやヒヤリハット報告書で気づきを出し合い、情報共有を確実に進めることができるよう努めている。また、「できること」に着目し、入居者の持っている能力を最大限活かして、より豊かな生活づくりにつなげられるよう努めている。今年度からリスクマネジメント委員会を設置した。事故やヒヤリハット報告の分析や身体拘束、虐待につながる恐れのある事例などを検討する中で、自分たちの支援において適切な声かけや関わり方ができているのか、再度振り返り、意識する機会となっている。また、介護記録ソフトを導入し、記録のデータ化を図るとともに記録にかかる時間を短縮させ、入居者と関わる時間を作ってきている。併せて、外部研修の参加が難しい中、オンライン研修を通して、職員一人一人の学ぶ場も持つことができている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当ホームは小規模多機能事業所を併設して運営していることで、利用者の中には小規模多機能から生活場所を移行された方もいる。小規模多機能を利用しながら在宅での生活を継続し、利用者や家族の状況等に合わせて移行することができることで、円滑な生活場所の移行にもつながっている。感染症問題が起きたことで、現状、外部の方との交流や利用者の外出が困難になっているが、ホームでは認知症サポーター養成講座のキャラクターを手作りして関係者に配布する等、ホームのことを知ってもらう取り組みが行われている。外出についても職員間で外出先の検討を行いながら、季節等に合わせた散歩を継続している。また、家族との交流も困難になっているが、定期的に家族との面談の機会をつくっており、家族からの要望等を把握し、関係が途切れないような取り組みが行われている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/>	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/>	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/>	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	内部研修等で、法人理念等についての話し合いを行う中で、全職員が発言できる場面を作り、理念を共有して実践につなげている。繰り返し会議等で、どの項目に基づくものなのかを話し合ったり、理念や基本方針等に沿っているのかを確認している。	運営法人の基本理念をもとに事業所毎に支援方針がつけられており、ホーム内にも掲示が行われている。また、職員一人ひとりが年度毎に目標をつくり定期的に確認を行うことで、理念の内容の振り返りと実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している。	町内会に加入している。新型コロナウイルス感染防止のため、地域の行事や法人内の行事は中止となり、直接的な交流はなかった。そのような状況でも、地域の方々より、野菜や米、手作りマスクなどをいただいたり、近所を散歩中にあいさつするなどの交流は継続できている。	現状、感染症問題が続いていることもあり、地域の行事が中止になる等、地域の方との交流の機会が限られた範囲となっている。ホームでは、地域の方の案内もあり、地区の作品展への協力を考える等、徐々に交流の再開を検討している段階でもある。	ホームでは、様々な機会を捉えながら地域の方との交流を継続していることもあるため、今後の感染症の状況もみながら、交流の再開が進むことを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	新型コロナウイルス感染防止のため、地域の行事等には参加できていない。そのような状況下でも、できることとして入居者が作成した認知症サポーターのマスコットキャラクターのストラップを市主催の研修で配布している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている。	今年度の運営推進会議は、新型コロナウイルス蔓延状況を考慮して、文書報告で行っている。利用状況や行事等の取り組み、ヒヤリハット・事故報告書の提出状況などを報告し、意見をいただいている。	会議については書面による実施が続いているが、会議の関係者に書面を配布して、ホームの現状を知ってもらい働きかけが行われている。また、併設事業所と合同で会議を実施しており、事業所全体の報告が行われている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる。	市の担当者とは一ヶ月に1～2回程、市役所に行ったり、メールなどで、現状を報告し、助言をいただいている。運営推進会議の案内や議事録も出している。また、入居者が作成した認知症サポーターキャラバンのマスコットキャラクターのストラップやぬいぐるみは好評で、市に贈与している。	ホームでは、管理者が市担当部署に出向く等、定期的及び随時の情報交換の機会をつくり、不明点等の解決につなげている。また、認知症サポーター養成講座に関して、キャラクターを手作りして配布する等、現状で可能な範囲で協力する取り組みが行われている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	職員全員で身体拘束の研修を行い、身体拘束をしないケアを常に意識しながら支援している。ヒヤリハット報告書の提出を推奨し、必要に応じて会議等で検討するなどして職員間で情報や対応策を共有している。今年度からリスクマネジメント委員会を設置し、月1回の委員会で、身体拘束をしていないか、行いそうになっていないかなどの検討も行っている。	身体拘束を行わない方針で支援が行われており、エレベーターも利用者が動かすことができることで、職員間で連携した見守りに取り組んでいる。また、今年度よりリスクマネジメント委員会を通じた身体拘束に関する現状確認が行われている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	職員全員で虐待防止の研修を行っている。普段から入居者の言動や様子を観察して、職員同士で情報交換と共有を行っている。今年度からリスクマネジメント委員会でも、虐待防止のため日々の入居者に対する言葉遣いや声かけの仕方などで気になることを職員から出してもらい、個々の入居者に適した対応かどうかを検討している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	内部研修等で、権利擁護について研修を行っており、必要な入居者が現れたときには速やかに対応できるように努めている。日頃から、新聞記事にも目を配ったり、掲示したりするなどして、活用に努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	契約締結の際は、専門用語はできるだけ使わず、入居者や家族が理解しやすい説明を行うように心がけている。不安や疑問が解消するまで十分な説明を行うように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	契約時に苦情申し立てについての説明を行っており、日常的にも意見や要望をくみ取り、運営に反映させるように努めている。新型コロナウイルス感染防止のため、家族懇談会は3月に対面で、9月は書面での報告とした。半年に1回以上は家族面談を実施している。また、必要時は連絡を取っている。家族の意見や思いを電話やメールで受ける対応も行っている。	ホームでは、感染症対策を行いながら、家族との懇談会を少人数にして開催する等、可能な範囲で交流が行われている。年2回の家族との面談についても継続しており、家族からの要望等の把握が行われている。また、毎月のホーム便りの作成が行われている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	会議や朝の打ち合わせ時等、意見や提案を伝える機会がある。必要に応じて、それらをどのように実践するかを検討した上で、反映されている。意見交換ページやヒヤリハット報告書等への記載を意識的に行い、実践に結びつけるように努めている。	ホームでは、月2回以上の職員会議の機会をつくっており、職員から出された意見等をホームの運営に反映する取り組みが行われている。また、管理者及び統括職員による職員との個別面談も行われており、職員一人ひとりの意見等の把握につなげている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	日常的に、個々の職員とコミュニケーションを図ることで、状況を把握し、家庭事情や職員の体調にも配慮した職場環境や条件の整備に努めている。定期的に年2回と必要時には個別で面談をするなどして、悩みを一緒に考えたり、目標を立てたりしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実践と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	日常的に、個々の職員とコミュニケーションを図ることで、各職員の力量や意欲等を把握するよう努めている。外部研修等には、新型コロナウイルス感染状況を踏まえて、感染対策を取りながら参加している。今年度は、オンライン研修を通じて、各職員が目標を持って、学ぶ機会を作っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	新型コロナウイルス感染防止のため、外部の勉強会、懇談会等への参加、見学等の受け入れは行っていない。必要時には、電話やファックス、メールなどで外部との情報交換を行っている。今年度は、他施設の職員と連携して、終末期の入居者と他施設に入居している家族との面会をご家族の希望もあり、実現させた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	相談があった時点で、管理者や職員が契約前に必ず本人に会いに行っている。そこで、本人自身から要望や不安等を聞き、本人が入居に際して安心できるように、信頼関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	家族が安心して、契約に臨めるように、最初の相談から契約に至るまで、家族自身の不安や要望等を受け止めるようにしている。何度でも面談を行い、疑問や不安を解消し、信頼関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	本人の状態や家族の状況、介護力等を聞き、すぐに入居ではなく、同一法人内の居宅介護事業所や他事業所への紹介も行っている。その時、本人や家族にとって、最適なものを提案できるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	職員は「待つ」という姿勢を大切に支援をしている。各入居者の「できること」に目を向け、一覧表等を更新している。個々の能力に合わせて参加できるような働きかけ方や入居者の状況に合わせた声かけの仕方等を工夫している。入居者の方から「何か手伝うことはないか」などと声をかけられることもあり、お互いに「ありがとう」と伝え合うようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	事故や著しい変化があったときはすぐに連絡し、状況説明や、今後の支援の仕方について話し合っている。新型コロナウイルスの蔓延状況を考慮し、書面や電話、メール、ファックスなどでやりとりも行っている。また、面会方法についてもベランダでの面会やオンライン面会に加えて、感染状況が落ち着いている時期は対策を徹底しての個室面会も行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	新型コロナウイルス感染防止のため、ご家族も含め、外部の方との接触機会を極力減らしている。携帯電話等を使用して家族や友人との交流を継続できるように支援している。また、テレビの地元まつわる番組を観たり、話題を会話に盛り込むなどして地域に触れることができるように努めている。今年度は、ご家族の協力もあり、入居者が家族の葬儀等に参列することができた。	現状、外部の方との交流が困難になっているが、利用者の中には携帯電話を所有している方もあり、電話等を通じて入居前からの方との交流を継続している方もいる。また、家族との外出についても、感染症対策の協力をお願いしながら身内の方の葬儀に出席する等、現状で可能な支援が行われている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	居室で過ごす時間も大切にしながら、入居者同士が一緒に時間を過ごすことができるように努めている。余暇活動で作った作品を廊下の壁に飾ったり、ベランダで家庭菜園や花の栽培を行い、日々のコミュニケーションにも役立てている。また、職員が間に入り、他入居者と楽しい関わりが持てるように支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	契約終了した方の近況を把握したり、退居後も相談や支援に努めている。看取りを行なったご家族が野菜等を持って来てくれたり、手作りマスクや衣類を寄贈してくれたりすることもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	「意向・要望シート」を活用し、日常の会話の中で出された入居者の意向や要望を共有、実現に繋げている。言葉での表現が難しい方は、顔つきや表情などからくみ取ることができるように努めている。今年度は、内部研修でひもときシートを使い、入居者の状況を把握、理解し、入居者にとってのより良い支援、統一した支援につなげている。	職員間で利用者を担当する取り組みも行いながら、利用者の意向等の把握が行われている。月2回以上の職員会議等を通じて利用者の意向等の検討を行い、日常の支援につなげている。また、「ひもときシート」等を活用したアセスメントを実施し、利用者の思い等の把握も行われている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	アセスメントシートを個々に合わせて作成しており、全職員でアセスメント表を見直す機会を作っている。また日常の会話の中から、何気ない一言を聞きもらさず、家族に確認などをし、本人の生活歴や暮らし方へのこだわり、思いをより深く把握できるよう努めている。特に新しい入居者の言葉や行動から、全職員でその人の情報を得るように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	日々の生活をできるだけ詳しく記録したり、日常での気づきを「意見交換ページ」で伝えるように努めている。また、会議で支援方法について検討したり、全職員で共有するなどして、その方に合った支援方法を工夫するよう努めている。「できること」に着目した個別のアセスメント項目を使い、入居者が力を発揮できる活動を提供できるように努めている。今年度から改訂長谷川式簡易知能評価を毎月行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	介護計画(ケアプラン)の見直し時期に、家族面談を行い、家族とも現状と今後についての情報を共有して、次期介護計画を作成している。会議でモニタリングやアセスメントの状況について意見を出し合い、次期介護計画に反映している。また、24時間シートとケアプランを連動させている。	介護計画については、6か月を基本に見直しが行われており、利用者の状態変化に合わせた対応が行われている。また、日常的なケアチェック表や毎月の職員間でのカンファレンス等を通じてモニタリングを行い、6か月での評価につなげている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	今年度から、介護記録ソフトを導入し、記録などをデータ化している。まだ不慣れであり、操作、入力作業に時間がかかることもあるが、本人の思いや状況が伝わるような記録を書くように心がけている。また、記録等の言葉の受け取り方等の意見をその都度、職員間で伝え合うことも行っている。入力内容の充実、活用が今後の課題である。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われず、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	各入居者や家族の状況の変化に合わせて、支援方法を工夫するように努めている。家族などにも気軽に「ニーズ」を伝えられるよう、「無理だと思いう前に、まずは相談してください。一緒に考えましょう。」と普段から声かけをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	町内会に加入し、地域の情報を得るように努めている。今年度も、地域の行事が中止となり、地域の方々と直接交流する機会は減少した。それでも、散歩やドライブに行くことで、季節を感じたり、地域の方とあいさつを交わしたりして、本人が孤独を感じないで今の暮らしを楽しめるよう支援している。また、市の図書館で借りた本を楽しむ等、資源を活用しながらの支援も行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	受診時に日常の様子などをまとめた記録を作成して、かかりつけ医とも円滑なコミュニケーションがとれるよう努めている。夜間や時間外でも対応してもらえる協力医療機関の医師との関係も築いている。今年度は、入居者本人、家族ともに安心して医療が受けられるように、新型コロナウイルスの感染状況を考慮した受診方法を提案している。	協力医による定期的及び随時の医療面での支援が行われているが、利用者の中には今までのかかりつけ医を継続している方もあり、家族の支援で受診が行われている。また、ホームに看護職員が勤務しており、医療面での支援に柔軟に対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	普段から入居者の健康状態を観察し、通常と違う様子や疑問、不安があれば看護職員に相談している。体調が不安定な入居者は、看護職員が確認を行った上で、入浴や清拭を行っている。受診結果や薬の変更等は、ミスがないように口頭と業務日誌での申し送りを徹底している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院があった場合には定期的に病院と連絡を取り合い情報交換を行っている。救急搬送を行う際に、職員も同行し情報を伝えるなど迅速な対応を行っている。また、新型コロナウイルス感染防止のため、退院した入居者は1週間ほど居室安静をしてもらい、主治医の許可を得てから通常の生活に戻るといった対応をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	家族とこまめに情報交換を行い、「ホームで家族を看取ってほしい」と家族に思ってもらえるような信頼関係作りや環境整備、家族の不安の軽減に努めている。今年度は新型コロナウイルスの感染防止対策を取り、家族との対面の面会を実現させた。毎年、内部研修で、看取りへ向けての心構え等を学んでいる。	身体状態の重い方もホームでの生活を継続しており、協力医と連携を行いながら利用者の看取り支援も行われている。利用者の段階に合わせた家族との話し合いを行い、ホームでの看取り又は次の生活場所への移行も含めた意向等の確認が行われている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	内部研修で緊急時の対応等を学んだり、会議や研修で色々なパターンを想定してのシミュレーションを行っている。必要時には個別に看護職員から急変時の対応の仕方等を学んでいる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協働体制を築いている。	新型コロナウイルス蔓延状況を考慮しながら、年に数回、様々なパターンを想定し、訓練等を行っている。運営推進会議参加者の見学や地域の防災訓練の参加は行わなかった。知立市と福祉避難所の協定を結んでいる。内部研修で、備蓄品や非常食のリスト、保管場所を実際に確認して、防災意識を高めている。	年4回を基本とする避難訓練の際には、事前予告なしで訓練を実施しており、非常時を想定した職員の意識向上に取り組んでいる。当ホームは地域の福祉避難所でもあり、市の関係者との連携も行われている。また、ホーム内に水や食料等の備蓄品の確保が行われている。	ホームでは、新たに非常用発電機の設置を予定しており、停電を想定した取り組みも行われている。様々な状況を想定しながら、非常災害に関するホームの継続的な取り組みに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	会議や研修等で、言葉づかいや声のかけ方、関わり方などについて話し合い、常に尊厳を意識した支援に努めている。日々の関わりの中でも、声のかけ方や関わり方が適切かどうか、職員同士で声をかけ合うように努めている。今年度は、リスクマネジメント委員会において、入居者の人格を守る言葉遣いや声かけの仕方を行っているか、個々の入居者に適した対応かどうかを検討している。	運営法人の職員指針には、利用者を尊重した対応を行うことや職員の意図が利用者に伝わるような接し方を行うことが掲げられており、職員の意識向上につなげている。また、利用者の身だしなみに関するチェック表をつくり、利用者を尊重した対応につなげている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	「できること」に着目したアセスメント表を活用して、現在の状態を全職員で把握し、自己決定しやすい声かけを工夫している。本人が話しやすい環境や話をしっかりと聞く時間を作ったり、入居者の表情などから読み取る工夫をしたりしている。本人が「やりたい」と思えるような関わり方や働きかけ方ができるように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	大体の1日の流れはあるが、入居者が自分のペースで生活できるように支援している。その日の勤務者で活動したい内容を打ち合わせ、充実した余暇活動や家事活動ができるようにしている。24時間シートや家事活動、余暇活動一覧表を活用し、個々のペースや特性を把握し、配慮できるように努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	個別の身だしなみチェック表を作成、更新している。朝と必要時に、洗面、整髪、髭剃りなどの声かけや介助を行っている。日常の服を選ぶ際にも、その方の好みを取り入れるように努めている。また、ホーム内での行事などでは季節を感じる衣装(浴衣、打掛など)を着る機会を作っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	「意向・要望シート」を活用し、日常の会話の中で出された食への意向や要望をおやつや食事メニューに取り入れるようにしている。また、食材カタログなどを見て旬の食材を知ったり、メニューや味付けと一緒に考えたりして、食事への関心を高めている。七夕や敬老会などの行事では仕出し弁当やおやつバイキングを楽しむことができた。	「意向・要望シート」等も活用して、利用者の希望するメニュー等を把握し、食事の提供につなげている。現状、外食が困難な状況でもあり、ホーム内で食事レクが行われており、利用者もできることに参加している。また、利用者の身体状態に合わせたムース食の提供も行われている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	食事、水分量、体重の推移を把握し、必要時には栄養補助食品も活用して、食事内容や分量を考えている。水分量を確保するために、個々の好みに配慮して提供したり、居室にお茶を常備したり、トロミや寒天等を使用したりしている。ミキサー食、ムース食の方にもメニューや使われている食材を伝えたりしている。今年度は、アレルギーのある入居者に対して、配慮した食事を用意して対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	スポンジブラシや歯磨きティッシュ等個々に合ったものを使用し、個々の状態に合わせて声かけや介助をしている。歯科の訪問診療で、ケアの仕方についての助言を受け、日常の支援に活かしている。食事前には、口腔体操や歌を歌って、舌の運動等を行い、嚥下が少しでもスムーズにできるように工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	チェック表で排泄パターンを把握し、できるだけ、トイレで排泄できるように支援している。介助が必要な入居者にはさりげない声かけやトイレ誘導をしている。排尿状況を把握し、尿の状態や回数などの変化を早期に察知し、医療との連携を行っている。パッドや失禁パンツを利用し、安易に紙パンツやオムツを使用しない支援を行っている。	日常の排泄記録の他にも、排泄チェック表も活用しており、職員間で情報を共有し、一人ひとりに合わせた排泄支援につなげている。トイレでの排泄を基本に考え、看護師も排泄に関する医療面での支援を行いながら、排泄状態の維持、改善につなげている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	下剤服薬の判断、確認手順等を見える化している。下剤が必要な入居者は、排便の状況に合わせて下剤を服用するタイミングなど考えながら調整している。また、排便の確認は、プライバシーを尊重しながら行っている。朝食にヨーグルト等の排便を促す食材を提供し、できるだけ自然な排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている。	一人ひとりの意思や希望を尊重して、ゆっくりとリラックスして入浴ができるように環境を整えている。体調不良時には、シャワー浴や清拭でも対応している。拒否のある方には、声かけの内容を工夫したり、時間や日を変えて声かけをするなどしている。入居者が気持ちよく入浴できるよう、職員間で意見や情報の交換を行っている。	毎日の入浴の準備を行い利用者の意向等も確認し、午後の時間に入浴ができるように支援が行われており、入浴を拒む方も声かけを行い定期的な入浴につなげている。利用者の状況等に合わせた随時のシャワー等の支援も行われている。また、看取りに近い方も入浴できるような支援も行われている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	個々の好みの明暗や温度調節などにも配慮して、入眠や休息しやすい環境づくりに努めている。日中も、体調等に配慮し、昼休憩や必要に応じて、居室での休息を勧めている。浮腫みのある入居者に対しては、浮腫み軽減のために、両足を挙上するなどの声かけをしている。シーツ類や寝具は定期的に洗濯したり干したりして、清潔、快適に休める環境を提供している。また、季節に合わせた寝具類の衣替えにも配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	個々の医療ファイルで、服用している薬や効能等を閲覧できるようにしている。確実に服薬できるように、個々の服薬方法を一覧表にしている。薬の変更があった場合は全職員で共有し、変更前後の体調や状況の変化を記録に残すようにしている。個人の状態に合わせて、服用に寒天ゼリーを使用することもある。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	家事活動や余暇活動の「できること」を個別で一覧表にし、2ヶ月に1度、更新をしている。個人の能力に配慮した活動を用意し、自己選択できるように工夫をしている。今年度は、書道、絵画クラブを月1回行い、作品を玄関に掲示している。また、季節に合わせた壁飾りを作ってホーム内の壁に飾ったり、プランターで花を育てたり、ストラップを作ったりして一緒に楽しむ機会を作っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	新型コロナウイルス感染防止のため、買い物、外食などの外出は行っていない。できる限り、季節を感じられるような近所の散歩や車でのドライブなどを楽しめるように支援している。	感染症問題が続いていることもあり、利用者の外出が困難になっているが、職員間で外出先を検討しながら、季節に合わせた散歩を実施する等、現状で可能な取り組みが行われている。また、自動車を活用したドライブも行われており、随時の外出の機会もつくり出されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	新型コロナウイルス感染防止のため、買い物外出や食事外出は行っていない。各入居者から購入希望が出されたものについては、職員が購入している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	入居者によっては、個人の携帯電話を使用して、好きな時に家族や友人と会話ができるように、充電の確認や操作方法を介助するなどの支援を行っている。毎年、年賀状を作成し、家族や親戚などにも出せるように支援している。今年度も新型コロナウイルス感染防止のため、オンライン面会も受け付けている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	室温はこまめに確認をして、エアコンの調整などを行っている。一緒に作った壁飾りを廊下に展示して見て楽しめるようにしている。食堂や畳部屋では、心地よい音量でテレビを見たり、音楽を聴いたり、本や新聞を自由に読んだりできるなど、過ごしやすい環境作りを努めている。共有スペースでは空気清浄機を設置し、CO2センサーを使いこまめな換気を行い、消毒の徹底を行っている。	ホームのリビングは建物の2階にあり、天窗も設置されていることで採光に優れた生活環境でもある。リビングに畳コーナーがあり、利用者の寛ぎの場所にもなっている。また、通路等の壁面には利用者の作品等の掲示が行われており、アットホームな雰囲気づくりが行われている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	日中は食堂や畳部屋を常に開放しており、自由に新聞や広告、本を見たり、数人で腰かけて談話している。新型コロナウイルス感染対策、風邪予防としてマスクを着用したり、必要時にはパーティションを使ったりして過ごすなど、共有スペースでも安心して楽しく過ごせる空間作りに努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	家族の写真や自分が作った作品、自宅から持ってきたなじみの品を飾るなどして、安心して過ごせる居心地の良い居室づくりに努めている。入居者の状態によっては、安全に配慮した居室や環境づくりに力を入れている。各入居者の状況に合わせた収納方法や表示方法を工夫している。半年に1回は職員と一緒に大掃除をし、不要なものなどの相談をしながら整理している。	居室には、利用者や家族の意向等に合わせた家具類や馴染みのある物等が持ち込まれており、一人ひとりに合わせた居室づくりが行われている。また、居室については、広めのスペースが確保されていることで、車椅子の方もゆったりと過ごすことができる空間がつけられている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	アセスメント(センター方式)や記録、会議等で情報収集し、安全で自立した生活を送ることができるように、環境整備に努めている。移動の際に危険がないように、廊下や共有スペースの物の置き場所等に配慮をしている。また、入居者の状態の変化に対応した環境整備にも努めている。内部研修で、危険予測について学び、安全な環境づくりや支援に努めている。		